今月のことば　　平成30年（2018）7月　＜No.143＞

「自力」と「他力」

2018年 サッカーワールドカップ ロシア大会は、日本が決勝トーナメントに進出し、たいへん盛り上がりました。決勝トーナメント進出をかけたポーランド戦は、日本が他会場の試合結果にゆだねる戦法をとり、賛否両論が沸き起こりました。その是非はともかく、テレビの司会者が口にしていた言葉が気になりました。「日本は“他力本願”の消極的な戦法で、決勝トーナメントに進んだ」というものです。

本来“他力本願”とは、浄土真宗の柱となるみ教えのことで、テレビで使われていた意味とはまったく異なります。ちなみに辞書を引いてみると・・・。

【他力本願】阿弥陀仏を頼って成仏を願うこと。**誤って**、だれかがしてくれることを期待して、自分は何もやらない意にも用いられる。　　『新明解 国語辞典』より

司会者は、誤って用いていたのです。そして「“他力本願”でなく“自力”での決勝トーナメントを目指すべきだったのでは？」という使い方もされていました。

この“自力”という言葉には、「自己責任で立派にやり遂げる」といった意味が含まれているように感じます。しかし**お念仏いただいた者**として見る時、“自力”（自己責任）のみが評価される人生は、「立派でいよう」と何かに追われ、いつも安心することができない歩みにも映ります。

親鸞聖人は『教行信証』のなかで、御自身のことを次のように見つめられています。

悲しきかな愚禿鸞 愛欲の広海に沈没し 名利の太山に迷惑して…

（悲しくも私・愚かな親鸞は、愛欲に翻弄され名声に惑わされて…）

浄土教というのは、元来大人の宗教なんです。いい歳をして悪いことだと知りながら、性懲りもなく愛欲や憎悪の煩悩を起こし、人をねたんだりそねんだりして、自分で悩み苦しんでいる、そんな**自分の愚かさとみじめさに気づきながら、その悪循環を断ち切れない自分に絶望したところから、浄土教は始まるのです**。その意味で浄土の教えは、決して「きれいごと」の宗教ではありません。

自分のぶざまな愚かさを見すえながら、そんな自分に希望と安らぎを与えてくれる阿弥陀如来の本願のはたらきを「他力」と仰いでいるのです。だから他力とは、私を人間の常識を超えた精神の領域へと開眼させ導く、阿弥陀仏の本願力を讃える言葉だったのです。

『親鸞聖人の教え問答集』梯 實圓 著 より

人間の常識でいう“自力”には、内面に眼を向け、自らの弱さ・愚かさを見つめる視点が欠けています。阿弥陀さまの“他力”のはたらきだからこそ、迷い悩みながら歩む私の人生が照らし出され、温かく包まれていく安心が与えられるのです。

慧日山 真光寺